

はそれほど気配りしなくてもよいことも関係しています。

栽培品種から遠縁の植物を親にした場合は、一足飛びに新品種が生まれるというわけにはゆかず、さらに別の野生種や栽培品種と交配したり、人工的に染色体の数を増減したり、と特別な工夫が必要になります。料理にたとえれば、食材をそのまま使うのではなく、長期間念入りに下ごしらえをしてから調理にと

りかかるようなものです。

近年、新しい性質を対象にした育種はますます盛んになる勢いで、近縁種・野生種の利用はでん粉原料用ばかりでなく広い用途に広がろうとしています。新しい性質を持った品種が新しい需要を呼び起こすという循環が良い方向に働いて、世の中が豊かになることは喜ぶべきことです。若い新進育種家たちの健闘に大いに期待するものです。

悲しくも逞しいアジアの食料

「世界の人口の6割以上が住むアジアの人口増はすさまじく、13億の中国、10億のインドでは、半世紀後には共に15億に達すると見込まれる。21世紀には、この地域では一層の水不足、それに環境破壊、経済危機などの要因が加わって食料不足は益々深刻となる。世界はアジアの食料問題を解決できるのか」。高名な環境・食料農業問題の権威、ワールドウォッチ研究所長レスター・ブラウン氏は、写真集「アジアと食料（久保田博二著、家の光協会発行）」の序文に、このように述べています。飽食の日本では実感が湧いてこないかもしれませんが、写真集にはふだん見ることのない人々の暮らしが多く紹介されています。

「アジアと食料」と題されてはいるものの、すべてが農業、食料に直接関係あるものばかりではなく、そこには無言のうちに厳しい現実が迫ってきています。

あふれるばかりの人、人、人。バングラデシュ・ダッカの水陸の通勤ラッシュ。客車の外側まですず成りのインド・ムンバイ近くを走る列車、フィリピン・マニラで野外ミサに集まる群衆。

災害も人の暮らし、食料生産を傷めつけます。インド・ビハール州、中国湖南省南景ですっぱり濁水に漬った家、中国新疆吐魯番での乾ばつで大きくひび割れた大地、フィリピン・ピナツボ火山の噴火により埋まった町。

ごみの山から少しでも金目になるものを拾おうとするインド・カルカッタでの光景、カ

ンボジア・プノンペンの通りで物乞いする親子、インド・デリーのレストラン前で食の施しを待つ人たちの空ろな目。……何と胸がしめつけられるような、わびしい現実でしょうか。

直接に食料の生産手段をもたない都市の貧民の暮らしは悲惨で、頭に大きな荷物を載せて運搬したり、建物・機械の解体に従事したりして僅かな日銭を得る人たちは安住の家もなく、道路で寝起きしているのでしょうか。

カルカッタで屋台の手伝いをする少年の写真もありました。手に持つ小さなナイフでジャガイモの皮をむいています。朝早く真暗ですが、朝食の準備のほか、食事の配達、掃除と休む間もなく働き、自分で皮をむきたいものを味わうこともできないかもしれません。彼もまた、疲れ切った身体を屋台の下に伸ばして、僅かな睡眠に生命の維持を托すのでしょうか。

しかし、一方でたくましく生きる営みをみせてくれる人たちも多く写し出されています。牛を使って畑起しをするネパールの農民、棒1本を農具としてサツマイモを植えるパプアニューギニアの原住民、牛を連れ、草を求めて移動するインドの家族、など。そこには、いわゆる近代化から取り残されても飢える心配はなく、多くを求めず黙々と働く姿がありますが、このように歩んで来た道を、これからも変りなく進んでゆくのでしょうか。

不況々々といわれながらも豊かな日本が、この先無駄のあるような暮らしを続けてよいのだろうか、と深刻に考えさせてくれる写真集でした。
(編集部)